

新・下野市風土記

「天平」——人々の願いと裏腹な時代(一)



下野市教育委員会 文化財課

天平は、奈良時代の729年から749年までの期間、聖武天皇の代の元号です。

この元号が定められた理由が、ある亀にあるとする説があります。甲羅に「天王貴平知百年」という文字が記された、約20cmの大きさの亀が献上されたというのです。この文字は、「天皇の政治は貴く平和で百年も続くであろう」という意味の吉祥句でした。亀の甲羅に自然に文字が浮き出るとは考えづらいため、何者かが作為的に記したのでしょう。

天平時代といえば、華やかな天平文化が有名ですが、その一方で、このような文句に願いをかけなくてはられないほど、世の中は不安に満ちていたのです。

天平時代と疫病の流行

以前、令和2年5月号の新・下野市風土記で「天平のパンデミック」と題して詳しく触れましたが、天平8年から9年頃にかけて、奈良時代最大の疫病(天然痘)が流行しました。

『続日本紀』によると、危機的状況となったのは天平9(737)年のこと、朝鮮半島から筑紫国大宰府(現在の福岡県太宰府市)に帰着した外航船から始まりました。この船が対馬に着いた

ときには既に船内で発症者が確認され、大宰府に入港したときには、乗組員の半数以上が罹患または死亡していたと記されています。

その後、疫病は瞬く間に九州から西国、畿内に拡大し、平城京でパンデミックを起こしました。政権の中枢にいた藤原四兄弟をはじめ、平城京の人口(推定8~10万人)のおよそ半分の人々が罹患し、亡くなったといわれています。

天平時代の天の乱れと社会情勢

『続日本紀』を丁寧に読み込んでいくと、疫病が流行した原因が、それ以前からの政治の乱れにあるとも読み取れる構成となっています。『続日本紀』は六国史と総称される官撰の国史ですから、編さん時に公の意図が反映されているはずですが、もしかしたら、と思わせる隠しアイテムのような構成は、編さん者のわずかばかりの抵抗だったのかもしれない。

天平に改元する前年の神龜5(728)年頃から、社会不安を予兆する記事が見られます。この年の元日は、律令国家の重要な儀式である元日朝賀の儀が雨で中止されました。4月には日食、5月と8月には金星が昼間に現れるなど、天体の乱れが観測され、9月13日に幼い皇太子が亡くなりました。その後も、20日に長さ二丈(約6m)の尾を引いた流れ星が4つに割れて宮中に落下するなど、凶兆が続きました。

翌、天平元(729)年2月、長屋王(天武天皇の孫、正二位左大臣)に国家を転覆しようとしたという疑いがかけられ、屋敷が兵に包囲されるという事件が起きました。長屋王とその妻である吉備内親王、子どもたちは自害しました。

その後の記事には、長屋王の祟りではないかと思いたくなるような不穏なものが続きます。

まず、天平2(730)年の元日朝賀の儀が雨のため取りやめとなりました。近畿地方では早害(日照り)が続き、平城宮神祇官の官舎が落雷による火災で焼失しました。そして、さらなる凶事を予兆するかのよう、紀伊国で海水の色が血の色のように赤くなり、日照りや地震、大風雨で、あちこちの人家や寺の堂塔が倒壊しました。

吉兆とされる白いカラスが越前国から献上されても、災禍は鎮まりませんでした。畿内では早魃の被害が拡大し、民がいなくなるとは後々税収が落ちると危惧したことから、天平5(733)年に「租」を無利息で貸し付けています。天平6(734)年には大地震が起り、「崩れた山が川を堰き止め、地割れが方々で起きた」ため、全国の神社の被害調査を実施しました。併せて歴代天皇の陵墓の被害調査もするよう指示が出されたことから、被害の大きさがうかがえます。

天皇は「地震の被害は恐らく政治に欠けたところがあったことによるもの(中略)諸官司はその職務を全うし、良く勤務すべし。今後励まなかったら状況に応じて官位を降す」と発言し、役人達により一層働くよう求めただけでなく、ついには「この頃の天地の災害は異常である。これは朕が人々を慈しみ大事にしないからだ」と自らも深く反省されました。